猿蟹合戦

芥川龍之介

蟹(かに)の握り飯を奪った猿(さる)はとうとう蟹に仇(かたき)を取られた。蟹は臼(うす)、蜂(はち)、卵と共に、怨敵(おんてき)の猿を殺したのである。――その話はいまさらしないでも好(よ)い。ただ猿を仕止めた後(のち)、蟹を始め同志のものはどう云う運命に逢着(ほうちゃく)したか、それを話すことは必要である。なぜと云えばお伽噺(とぎばなし)は全然このことは話していない。

いや、話していないどころか、あたかも蟹は穴の中に、臼は台所の土間(どま)の隅に、蜂は軒先(のきさき)の蜂の巣に、卵は籾殻(もみがら)の箱の中に、太平無事な生涯でも送ったかのように装(よそお)っている。

しかしそれは偽(いつわり)である。彼等は仇(かたき)を取った後、

警官の捕縛(ほばく)するところとなり、ことごとく監獄(かんごく)に投ぜられた。しかも裁判(さいばん)を重ねた結果、主犯(しゅはん)蟹は死刑になり、臼、蜂、卵等の共犯は無期徒刑の宣告を受けたのである。お伽噺(とぎばなし)のみしか知らない読者はこう云う彼等の運命に、怪訝(かいが)の念を持つかも知れない。が、これは事実である。寸毫(すんごう)も疑いのない事実である。

　蟹(かに)は蟹自身の言によれば、握り飯と柿(かき)と交換した。が、猿は熟柿(じゅくし)を与えず、青柿(あおがき)ばかり与えたのみか、蟹に傷害を加えるように、さんざんその柿を投げつけたと云う。しかし蟹は猿との間(あいだ)に、一通の証書も取り換(か)わしていない。よしまたそれは不問(ふもん)に附しても、握

り飯と柿と交換したと云い、熟柿とは特に断(ことわ)ってい
ない。最後に青柿を投げつけられたと云うのも、猿に
悪意があったかどうか、その辺(へん)の証拠は不十分である。
だから蟹の弁護に立った、雄弁の名の高い某弁護士も、
裁判官の同情を乞うよりほかに、策の出づるところを
知らなかったらしい。その弁護士は気の毒そうに、蟹
の泡を拭ってやりながら、「あきらめ給え」と云ったそ
うである。もっともこの「あきらめ給え」は、死刑の
宣告を下されたことをあきらめ給えと云ったのだか、
弁護士に大金(たいきん)をとられたことをあきらめ給えと云った
のだか、それは誰にも決定出来ない。

その上新聞雑誌の輿論（よろん）も、蟹に同情を寄せたものはほとんど一つもなかったようである。蟹の猿を殺したのは私憤（しふん）の結果にほかならない。しかもその私憤たるや、己（おのれ）の無知と軽卒（けいそつ）とから猿に利益を占められたのを忌々（いまいま）しがっただけではないか？　優勝劣敗の世の中にこう云う私憤を洩（も）らすとすれば、愚者にあらずんば狂者である。――と云う非難が多かったらしい。現に商業会議所会頭某男爵（だんしゃく）のごときは大体上（かみ）のような意見と共に、蟹の猿を殺したのも多少は流行の危険思想にかぶれたのであろうと論断した。そのせいか蟹の仇打（かたきう）ち以来、某男爵は壮士のほかにも、ブルドッグを

十頭飼(か)ったそうである。

かつまた蟹の仇打ちはいわゆる識者の間(あいだ)にも、一向(いっこう)好評を博さなかった。大学教授某博士(はかせ)は倫理学上の見地から、蟹の猿を殺したのは復讐(ふくしゅう)の意志に出(で)たものである、復讐は善と称し難いと云った。それから社会主義の某首領は蟹は柿とか握り飯とか云う私有財産を難有(ありがた)がっていたから、臼や蜂や卵なども反動的思想を持っていたのであろう、事によると尻押(しりお)しをしたのは国粋会(こくすいかい)かも知れないと云った。それから某宗(ぼうしゅう)の管長某師は蟹は仏慈悲(ぶつじひ)を知らなかったらしい、たとい青柿を投げつけられたとしても、仏慈悲を知っていさ

えすれば、猿の所業を憎む代りに、反（かえ）ってそれを憐んだであろう。ああ、思えば一度でも好（い）いから、わたしの説教を聴かせたかったと云った。それから――また各方面にいろいろ批評する名士はあったが、いずれも蟹の仇打ちには不賛成（ふさんせい）の声ばかりだった。そう云う中にたった一人、蟹のために気を吐いたのは酒豪（しゅごう）兼詩人の某代議士である。代議士は蟹の仇打ちは武士道の精神と一致すると云った。しかしこんな時代遅れの議論は誰の耳にも止（とま）るはずはない。のみならず新聞のゴシップによると、その代議士は数年以前、動物園を見物中、猿に尿（いばり）をかけられたことを遺恨（いこん）に思っていた

そうである。

お伽噺しか知らない読者は、悲しい蟹の運命に同情の涙を落すかも知れない。しかし蟹の死は当然である。それを気の毒に思いなどするのは、婦女童幼のセンティメンタリズムに過ぎない。天下は蟹の死を是なりとした。現に死刑の行われた夜、判事、検事、弁護士、看守、死刑執行人、教誨師等は四十八時間熟睡したそうである。その上皆夢の中に、天国の門を見たそうである。天国は彼等の話によると、封建時代の城に似たデパアトメント・ストアらしい。

ついでに蟹の死んだ後、蟹の家庭はどうしたか、そ

れも少し書いて置きたい。蟹の妻は売笑婦(ばいしょうふ)になった。なった動機は貧困のためか、彼女自身の性情のためか、どちらか未(いま)だに判然しない。蟹の長男は父の没後、新聞雑誌の用語を使うと、「飜然(ほんぜん)と心を改めた。」今は何でもある株屋の番頭か何かしていると云う。この蟹はある時自分の穴へ、同類の肉を食うために、怪我(けが)をした仲間を引きずりこんだ。クロポトキンが相互扶助論(そうごふじょろん)の中に、蟹も同類を劬(いたわ)ると云う実例を引いたのはこの蟹である。次男の蟹は小説家になった。勿論(もちろん)小説家のことだから、女に惚(ほ)れるほかは何もしない。ただ父蟹の一生を例に、善は悪の異名(いみょう)であるなどと、好(い)い

加減（かげん）な皮肉を並べている。三男の蟹は愚物（ぐぶつ）だったから、蟹よりほかのものになれなかった。それが横這（よこば）いに歩いていると、握り飯が一つ落ちていた。握り飯は彼の好物だった。彼は大きい鋏（はさみ）の先にこの獲物（えもの）を拾い上げた。すると高い柿の木の梢（こずえ）に虱（しらみ）を取っていた猿が一匹、――その先は話す必要はあるまい。

とにかく猿と戦ったが最後、蟹は必ず天下のために殺されることだけは事実である。語を天下の読者に寄す。君たちもたいてい蟹なんですよ。

（大正十二年二月）

底本：「芥川龍之介全集5」ちくま文庫、筑摩書房
１９８７（昭和62）年２月24日第１刷発行
１９９５（平成７）年４月10日第６刷発行
底本の親本：「筑摩全集類聚版芥川龍之介全集」筑摩書房
１９７１（昭和46）年３月〜１９７１（昭和46）年11月
入力：j.utiyama
校正：earthian
１９９８年12月28日公開
２００４年３月９日修正

青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。